

# I 研究主題

## 「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善 ～ 学びを生活につなげる授業づくりをめざして ～

### 1 本校の取り組みの経過

本校では、平成29～30年度に研究主題を「児童生徒一人一人の「主体的な学び」をいかに実現するか～PDCAサイクルに基づいた授業づくり～」とし主題設定理由を「よりよい授業づくりを行いたい。」  
「PDCAサイクルに基づいた授業づくりを行いたい」「主体的に学ぶ姿について考えたい」として2年次研究で取り組んだ。

成果として、次の3点が挙げられた。

- 新学習指導要領について理解を進めることにより、教科としての目標、取り組む内容、配慮点などをより一層意識して授業づくりをすることができた。
- 「主体的に学ぶ姿」について、各グループおよび全体で共通理解することができた。
  - ・やる気・意欲をもって取り組む姿
  - ・納得・理解・判断して取り組む姿
  - ・興味関心をもち自ら進んで取り組む姿
- PDCAサイクルをより意識して、日々の授業づくりに生かすことができた。特に、C(評価)→A(改善)について取り組み、授業評価シートを作成、活用したことで児童生徒の学習評価がその後の指導につながり、学習評価と指導の一体化を図ることができた。

一方課題として、次の2点が挙げられた。

- つなぐという視点のもと、小学部、中学部、高等部などライフステージを踏まえた縦のつながり、また、各学部を超えて発達段階などを中心とした横のつながりをさらに深めていきたい。
- 各グループで取り組んだ評価方法の効果的な活用、更なる発展を目指し、授業改善を進めていきたい。

そこで、これまでの研究の成果と課題、アンケート結果などを参考に、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」「学びをつなげる」のキーワードに焦点を当てて授業実践の研究を進めることとした。

## 2 研究主題について

新学習指導要領では、様々な時代の変化に対応するために生きて働く力を必要とし、「生きる力」を具体化して「資質・能力」として示した。その「資質・能力」を生きて働く「知識・技能」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」、変化に積極的に向かい、課題解決していこうとする「学びに向かう力や人間性等」の三つの柱に整理して育てていくこととしている。

そこで、これから大切になってくるのは授業の質である。児童生徒が、質の高い学びができるよう授業改善していくことは必須であり、その授業改善の視点として「主体的・対話的で深い学び」が示された。これは、特別支援教育においても同様である。

本校では、学校教育目標である「心豊かに生き生きと生活できる人間を育てる」ために児童生徒がどのような力を発揮しているのかを具体的に見取りながら授業実践を積み重ねていくことにより、「質の高い学び」に努めている。このような実践に加え、新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った児童生徒への働きかけと新たな手立てを探りながら、前研究の課題である学習チェック（評価）を授業改善に役立てるとともに、学部間や教科等横断的な学びといった「学びのつながり」を再確認することで、学びを生活につなげることができる「質の高い学び」を実現したいと考える。

## Ⅱ 研究の目的と内容

### 1 研究の目的

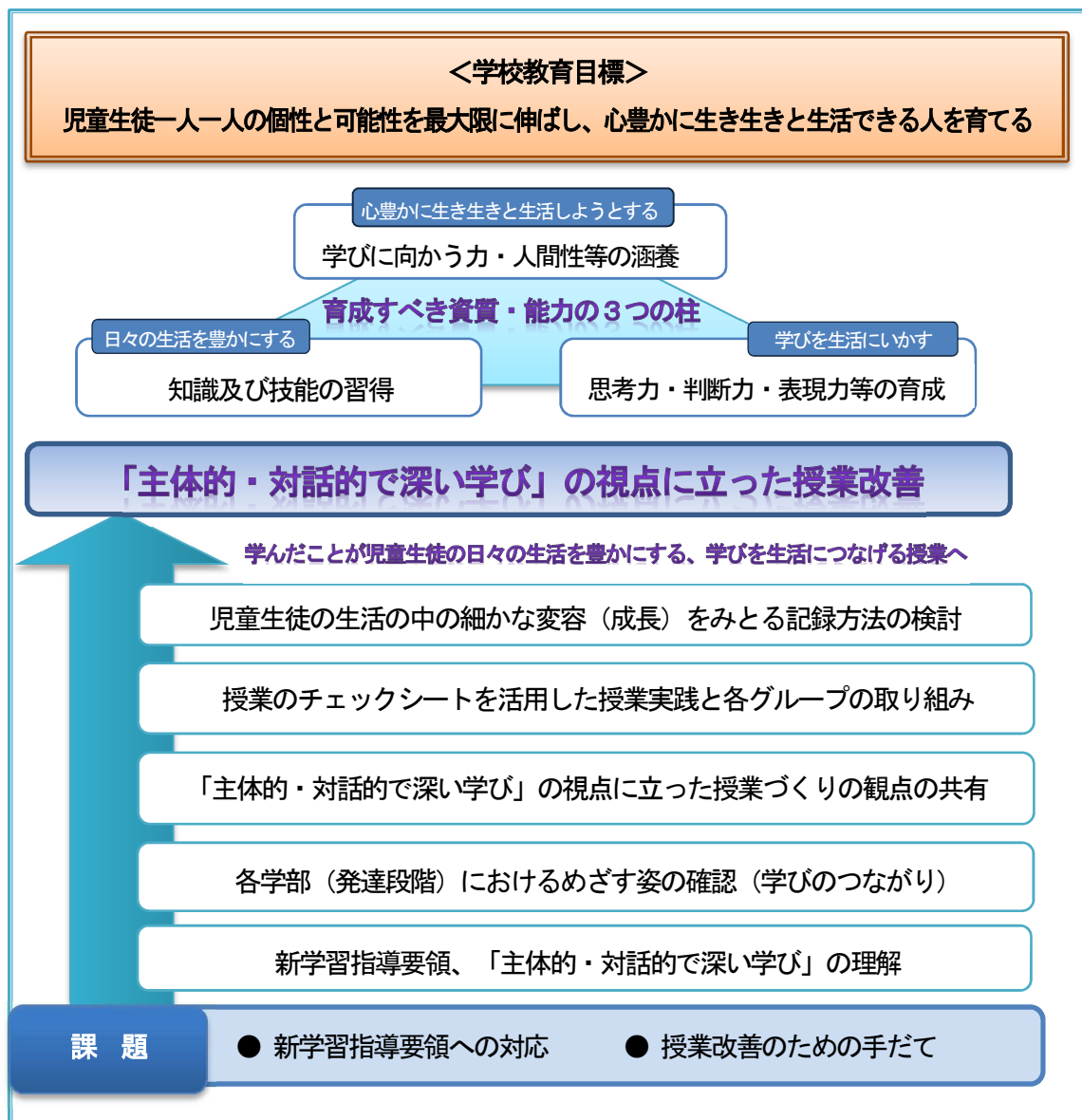
本校における「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の具体的なあり方について各学部や発達段階に応じて整理することで「学びのつながり」を明らかにするとともに本校の「授業づくりの視点」として評価を行うことで、学びを生活につなげることができる「質の高い学び」への授業改善を図る。

### 2 研究の内容（方法）

- (1) 新学習指導要領及び「主体的・対話的で深い学び」についての理解（全校研修会、高教研講演会）

- (2) 「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業づくりにおける観点の共有化（新学習指導要領に沿った学習指導案様式の作成、授業づくりの観点、発達段階（学部）に応じためざす姿の整理、授業のチェックシートの作成）
- (3) 学部間の実態共有や授業改善のヒントを得るための授業見学の実施（授業見学期間）
- (4) グループ内授業検討会、全校授業検討会の実施（新様式における指導案の作成、授業のチェックシートの活用、児童生徒の変容の評価、授業づくりの観点の再確認）
- (5) 各学部（研究グループ）における研究主題に関する取り組み（グループ研究）

### 3 研究の構想図（【図1】）



## IV 研究体制

### 1 研究の基本的な進め方

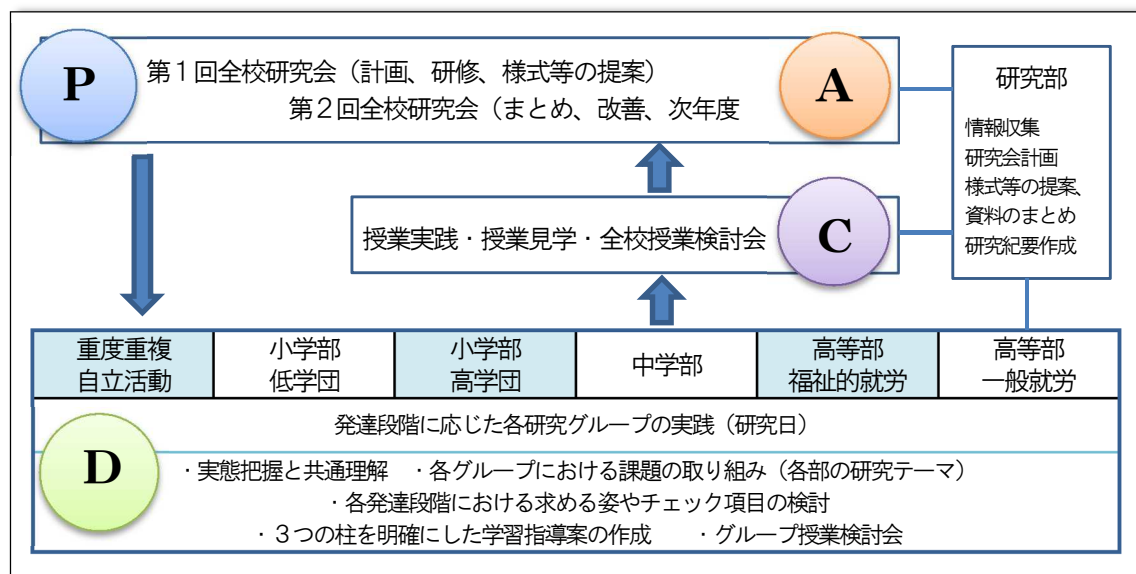
令和元年度から令和2年度の2年次計画で取り組む。

1年次目は、新学習指導要領の研修を深めながら、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」「学びをつなげる」をキーワードに学部別研究（6グループ）として実践研究に取り組む。実践研究では、各学部（グループ）段階における「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」のめざす姿を表すこと、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を意識した授業実践を行い、各学部（グループ）の実態や課題を共有すること、本研究を推進するために必要な各学部（グループ）の課題を明らかにすること等について取り組むこととした。

2年次目は、1年次目の成果と課題を引き継ぐとともに、研究のまとめの年度として、本校としての「主体的・対話的で深い学び」にむけた授業改善の手だてを考え、実践をとおして確かなものにしていくこととした。具体的には、手だての作成の方針を全体場で協議・確認し、各学部（グループ）に持ち帰って実践し、手だての検証と改善を進めることとする。共通の枠を提示し、各学部（グループ）の実態に応じた表現や内容を工夫し作り上げることで、本校の各学部（グループ）の系統性やつながりを確認することで、より質の高い授業が実施できるよう改善を図りたいと考える。

### 2 研究体制図（【図2】）

【図2】研究体制図



### 3 各研究グループの研究テーマ

1年次目において、「主体的・対話的で深い学び」を推進するための各学部段階における中心的な課題をもとにグループの研究テーマを設定した。2年次目においても改善を加えながら、継続して取り組むことで課題の解決を図るとともに、各学部の課題や特色を全校で共有する機会としたいと考える。

グループ	研究テーマ	
重度重複 (自立活動)	重度重複障がい有する児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」とは ～個から集団へ学びをつなげる授業づくり～	◎北條 ○三浦
小学部 低学団	児童の人や物とのかかわりに焦点をあてた授業づくり ～遊びの指導をとおして～	◎安部 ○米倉
小学部 高学団	自分の思いを表現するための授業づくり ～教科間のつながりを意識した授業実践をとおして～	◎刈屋 ○桂葉
中学部	「わかる！できた！やってみたい！」学んだことを生かせる授業づくり ～生徒の実態に合わせた「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業実践をとおして～	◎佐藤克 ○菅原桃
高等部 (福祉的就労)	作業学習における「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた 個々の意思表示を広げる支援方法	◎小坂 ○臼澤
高等部 (一般就労)	作業学習における「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた 表現力を高める支援方法	◎柿崎 ○佐藤修

◎はグループリーダー、○はサブリーダー（研究部）

## V 推進計画

### 1 1年次目（令和元年度）の取り組み

月	全体の取り組み	グループの取り組み
4		研究テーマ、テーマ設定の理由等の検討
5	第1回全校研究会 (研究の進め方提案)	新学習指導要領の理解、「主体的・対話的で深い学び」のとりえ 授業づくりの観点
6	授業見学	児童生徒の実態情報交換（個別の指導計画）
7	高教研講演会(対話力アップセミナー)	新学習指導要領の理解
8	授業検討会情報の回覧	グループ授業検討会・授業改善・学習チェックシートの検討（一部）
9	↓	↓ 各グループの現時点での学習指導案の様式の確認
10	↓	↓
11	第1回全校授業検討会	授業提案（中学部）
12	第2回全校授業検討会	授業提案（高等部）
1		1年次のまとめ、成果と課題
2	第2回全校研究会（まとめ）	
3		

## 2 2年次目（令和2年度）の推進計画

月	全体の取り組み	グループの取り組み
4	2年次目の研究の進め方についての提案	全校の取り組みの検討、各グループの研究テーマの確認
5	第1回全校研究会及び第1回全校研修会 ○ 各発達段階におけるめざす姿提案 ○ 授業のチェックシートの提案 ○ 学習指導案の新様式の提案	全校及び各グループの推進計画について 研究のまとめ方の方向性について
6	授業見学 ○ 授業参観シートの活用	児童生徒の実態把握と共通理解（個別の指導計画） 各グループにおけるめざす姿【図3】の検討
7	高教研講演会（第2回全校研修会） 「主体的・対話的で深い学び」の捉えと学び の実現について 講師：大西孝志氏（東北福祉大）	各グループの研究テーマに関する手だての作成・検討 授業検討会に向けての題材・授業者の選出
8	授業検討会情報の校内発信	授業検討会・授業改善・授業のチェックシートの検討
9		新様式による学習指導案の作成・検討
10	↓	↓
11	第1回・第2回全校授業検討会 *3分科会に分かれてのワークショップ形式 (1)授業のねらいの説明、ビデオ視聴(15分) (2)ワークショップ(5~6名×3G)(30分) ① 授業について ② 各グループの研究テーマに関すること (3)発表(各G×2分)(6分) (4)助言(4分)	<第1回(11月) 授業提案グループと分科会> 小学部低学団、小学部高学団、中学部  <第2回(12月) 授業提案グループと分科会> 高等部一般就労、高等部福祉的就労、重度重複自立活動  *各分科会の構成案 …… 1分科会15~17名程度 授業者(2~3名)、グループリーダー(司会)、副リーダー(記録)、他グループより2~3名ずつ、助言者1名(校長または副校長)
12		
1	全校授業検討会のまとめ(課題とその対応)	各グループの研究のまとめ
2	第2回全校研究会(研究のまとめ)	研究紀要用の原稿の確認(グループ内回覧)
3	研究紀要「五葉の実践」の発行	

## VI 研究実践

## 1 新学習指導要領及び「主体的・対話的で深い学び」の理解と整理

## (1) 全校研修会

～ 本研究における基本的な考え方の整理と確認 ～

新学習指導要領の研修については、前年度に全体的なポイントについて県による研修会を全職員が受けている。今年度は、その復習と授業実践や評価を行っていく上で特に必要と思われることや本校におけるとらえについて研修を行い、本研究を推進していくための考え方について整理を行った。次にその主な内容を示す。



① 「確かな学力育成プロジェクト」及び「いわての授業づくりの三つの視点」

令和2年2月に岩手県教育委員会から示された「確かな学力育成プロジェクト」及び「いわての授業づくりの3つの視点」(【右図】)は、児童生徒の資質・能力を育成するために必要な「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に不可欠な要素をまとめたものである。

県が示したこの考え方は、特別支援学校である本校においても基本は同じであると考えることから、本研究を推進するための手だてを考慮うえで参考にしたいと考える。

ただし、通常の教育をイメージした言葉で表現されている部分については、本校の実態に合わせて、適宜変更することで、より、実際的でイメージしやすいものにしたと考え、次項のように整理を行った。



② 本校の学校教育目標と「育成すべき三つの柱」の関係について

<本校の学校教育目標>

児童生徒一人一人の個性と可能性を最大限に伸ばし、心豊かに生き生きと生活できる人を育てる

本校の学校教育目標は、「一人一人の個性と可能性を最大限に伸ばす(手段)」ことによって、「心豊かに生き生きと生活できる人を育てる(目標)」という構成になっている。

「一人一人の個性と可能性を最大限に伸ばす」ことは、学校教育の目的の一つであるとともに特別支援教育の重要な役目でもあり、また「一人一人の」というところから、児童生徒の能力やニーズに応じたという意味も含んでいると考える。

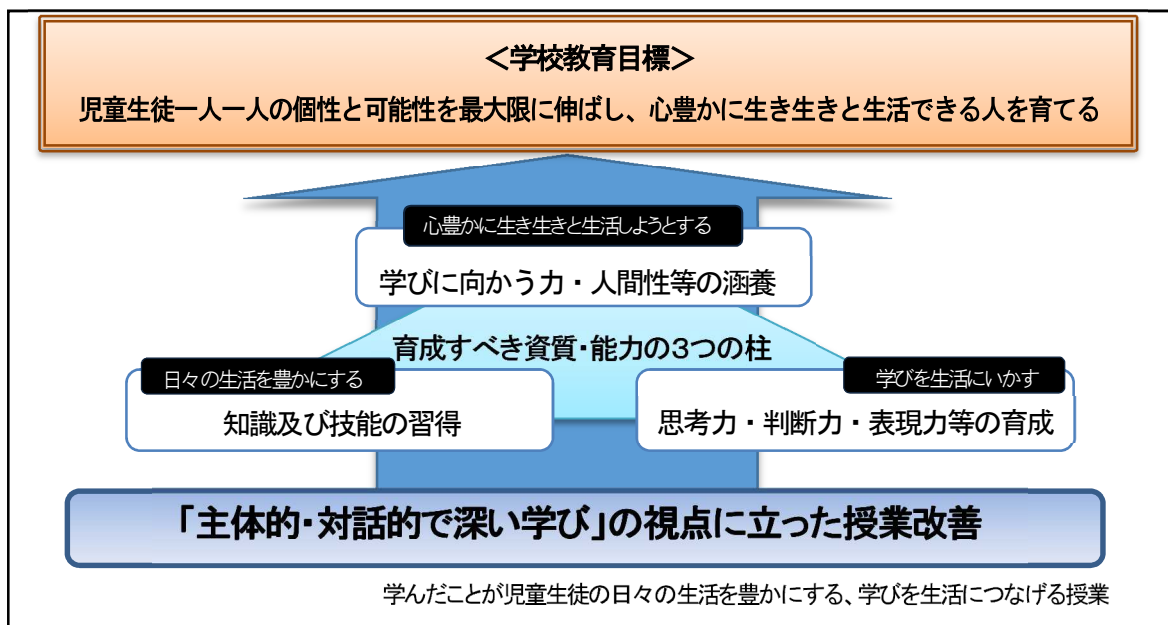
「心豊かに」は、知・徳・体の「徳」にあたる部分としてとらえることができると思う。

「生き生きと生活できる人」には、知・徳・体の全てがふくまれており、在籍中及び卒業後の理想の姿が描かれている。この中に社会との関わりは明確に書かれてはいないが、「生活」の中に、家庭生活だけではなく、社会生活、地域生活においてもという意味が込められていると推測できる。

これらを育成すべき資質・能力の三つの柱に当てはめてみる。三つの柱の基本部分（知識及び技能の習得）「思考力・判断力・表現力等の育成」「学びに向かう力・人間性等の涵養」は、共通のものであることから、変えるとすれば、「意義（何のために）」にあたる部分となる。前図の岩手の確かな学力育成プロジェクトと比較してみると次のようになる。

<p>&lt;目標&gt; (県全体)「知・徳・体を総合的に兼ね備えた、社会を創造する人間」 (本校)「児童生徒一人一人の個性と可能性を最大限に伸ばし、心豊かに生き生きと生活できる人を育てる」</p> <p>&lt;育成すべき資質・能力の三つの柱&gt;                  「生きて働く」 → 「日々の生活を豊かにする」 <u>知識及び技能の習得</u>                  「未知の状況にも対応できる」 → 「学びを生活に生かす」 <u>思考力・判断力・表現力等の育成</u>                  「学びを人生や社会に生かそうとする」 → 「心豊かに生き生きと生活しようとする」 <u>学びに向かう力・人間性等の涵養</u></p>
---

上記のことを図に表すと下図のようになる。学校教育目標と3つの柱からの考えると、本校の「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善のポイントは、「学んだことが児童生徒の日々の生活を豊かにする、学びを生活につなげる授業」になっているかということになる。





### ③ 本校における「主体的・対話的で深い学び」の姿について

文部科学省の資料では「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」について以下のように示されている。

#### 【主体的な学び】

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

#### 【対話的な学び】

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

#### 【深い学び】

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

本校における「主体的・対話的で深い学び」のめざす姿を考える場合には、本校には小学部から高等部までの発達段階の児童生徒が在籍していることや障がいの重い児童生徒も在籍していることから、児童生徒の実態に合わせた表現にしたいと考えた。「幼児教育における学びの過程のイメージ」を参考にしながら、子ども主体の姿として、「（児童生徒が）～している姿」となるように次のように表現した。

#### <本校における「主体的・対話的で深い学び」のめざす姿>

##### <主体的な姿>

見通しをもって自分で行動しようとし、生活を楽しもうとしている姿

##### <対話的な姿>

人・もの・こととの関わりで課題を解決したり、自分の考えを広げたりしている姿

##### <深い学びの姿>

学んだことが身につき、生活に生かしている姿

## （２）高教研講演会

岩手県高等学校教育研究会特別支援教育部会の本校の今年度の講演会では、本研究テーマに関連させ、「新学習指導要領における特別支援教育について『主体的・対話的で深い学び』の捉えと学びの実現について」と題して、東北福祉大学教授の大西孝志氏よりご講演をいただいた。

全職員で特別支援教育の現在の状況や課題、各教科や合わせた指導の基本や指導のポイントを具体的に学ぶことで、「主体的・対話的で深い学び」についての理解を深めることができた。

以下に参加者の感想の一部を紹介する。

- ◇ 子供の全体数の減少に対し、特別支援教育の対象となることも増加しているという状況を受けとめ、改めて特別支援教育の専門性の向上が自分にとって必要だと感じた。また、ニーズに合った教育をすることで子供の可能性がのびるという考え方が普及してきていることは子供の教育にとって良い流れだと感じた。改定による教材の変化がとても印象に残った、自分だったら変化には気づかないと感じた。教材一つ一つの小さな変化にアンテナを張れるようにすることが教材研究において必要だと感じた。知的の支援学校では教科の内容について教材研究をする機会は少ないが今後意識的に取り組む必要があると思った（小学部職員）。
- ◇ 専門性について、幅広い経験や知識が必要であることを知った。現代の子供達は育ちの家庭での経験が不足しており、概念形成が難しいと感じる、若い先生方の中にも子供達と関係作りや指導に困難さを感じている方がいて、その原因は先生の経験不足ではないか・・・とはっとさせられた。今後経験不足の先生が経験不足の子供達に教えるという学校現場になっていく、専門的な知識のみで指導するだけではうまくいかない。人として豊かな経験や幅広い興味知識が大切なのだ実感した。働き方改革は自らの生活を豊かにし、自らの専門性を高めることにもつながるのでは。新学習指導要領の三観点についても具体的に説明していただき、とてもわかりやすかったです（小学部職員）。
- ◇ 「合わせた指導の評価」は、どの教科を合わせているのかを明確にし、「教科の評価」を行うということを知り、いつも生単や作業の目標で悩んでいたが、こういうことかとスッキリした。指導の重複や漏れがないように、国語・算数（数学）の指導内容の一覧表を作成し、小1から実施した内容を記入していくという方法をとれば良いと思った。（中学部職員）
- ◇ 「求める資質・能力、教育課程の基本的な考え方は、障害のない児童生徒に対するものと変わらない。」という考え方の根拠を知った。見方・考え方を働かせ資質・能力を育成するこの重要性を学んだ。（高等部職員）
- ◇ 大西先生の「アクティブラーニングとは、頭の中の『考える』活動がアクティブになっているかどうか、がポイントです」というお話を聞き、主体的・対話的で深い学びの対話には、自己との対話（頭の中の『考える』活動）も含まれているのだと気付くことができました。また、見方・考え方を“一度は教わる経験が必要”という点については、本校の教育活動全体を通して統一することで、子どもたちが「やってみよう」と安心してチャレンジができる環境にしていければ、と思いました。（高等部職員）
- ◇ 重度重複障がいや有する児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」の捉え方について知りたい。（特に「深い学び」について）（分教室職員）
- ◇ 通常の子も特別なニーズを持った子も基本的に同じ評価であること。合理的配慮を提供しないことも合理的配慮であること。合理的配慮は、障害のある子、ない子の双方に公平で、将来につながる配慮であること。見かけが地味でも、子どもの中でアクティブラーニングしていること。生活上の基本的なことができていくことが学習の基礎になっていること。（分教室職員）

#### <「新学習指導要領及び「主体的・対話的で深い学び」の理解と整理」のまとめ>

- 育成すべき3つの柱について本校としてのとらえを確認することができた。
- 本校における「主体的・対話的で深い学び」のめざす姿を確認することができた。
- 研修会・講演会を通して新学習指導要領及び「主体的・対話的で深い学び」の理解を深めた。
- 本校の「合わせた指導」の内容のまとまりを明確にすること。3観点に基づいた評価を行うこと。

## 2 「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業づくり

### (1) 発達段階（学部）に応じためざす姿の整理

本校では小学部から高等部までの12年間の教育活動を行っている。生活年齢によってその年齢段階におけるキャリア発達課題と児童生徒の実態やニーズにより、各学部の学部目標は立てられている。

「主体的な学び」には「見通し」が不可欠である。したがって、最終的なめざす姿を明確にもち、そのためには今の段階では何が必要で、その次には何が必要かといったことを指導者が共通理解し、児童生徒の実態に応じて適切に示していくことが必要であると考えた。

そこで、各学部の学部目標とキャリア発達課題の系統性を図としてまとめることで、発達段階に応じた児童生徒のめざす姿を整理したいと考えた。

【図3】は、「学校教育目標等と各研究グループのテーマの関係及び各段階の『主体的・対話的で深い学び』のめざす姿を表したものである。

この図の作成に当たっては、研究の1年次目で検討されたそれぞれの学部における「主体的・対話的で深い学びの姿」の根拠となっている学校教育目標及び各学部目標、キャリア発達課題等を発達段階にそって並べることで、小学部入学時から高等部卒業時までのキャリア発達課題とめざす姿を把握できるように心がけた。そして研究の2年次目で、この図の検証を実践をとおして行うこととした。

したがって【図3】は、研究実践の中で何度か見直しが行われその都度、表現等が見直されてきたものである。それぞれの学部段階（グループ）における「主体的・対話的で深い学びのめざす姿」には、それぞれのグループにおける指導者の願いや思いが込められている。このことについては、次章の各研究グループの実践でまとめているので参照されたい。

以下にこの図の目的やねらいについてまとめる。

#### <目的>

各学部間のつながりや系統性を明らかにし、学部を超えて授業を見合う視点を共有することで、12年間を見通した指導・支援を行い、児童生徒の力を最大限に伸長する。

#### <ねらい>

- ・各グループの取り組みやめざしていることなどを一覧にすることで、学部間の共通理解を進めること
- ・各学部の目標や発達課題等との関連を明確にすることで、各学部間のつながりや系統性を明らかにする（わかりやすくすること）
- ・各学部のお互いのめざすところや大切にしていることを知ることで、学部をこえて授業を見合うための視点をえること（どこを見れば良いかわかるようになる）
- ・12年間の育ちを見通した指導・支援で子どもの力を最大限に伸長につなげること

#### <「発達段階（学部）に応じためざす姿の整理」のまとめ>

- 発達段階に応じためざす姿の整理をすることで学部間の役割や連携の理解を深めることができた。
- 本校の学びの系統性を見通すための手だてを作成することができた。
- 【図3】の今後の活用方法や見直しについてどのようにしていくか。

学校教育目標等と各研究グループのテーマの関係及び各段階の「主体的・対話的で深い学び」のめざす姿【図3】

児童生徒一人一人の個性と可能性を最大限に伸ばし、心豊かに生き生きと生活できる人を育てる ・明るく元氣な人 ・思いやりのある心豊かな人 ・自分から進んで取り組む人 ・自分から進んで取り組む人 ・みんなと協力し共に学び人 ・生活に喜びをもち生き生きと活動する人			
学校教育目標	小学部 (自分のことができる・周囲とかかわる)	中学部 (できることを広げる・自分の生活につなげる)	高等部 (できる力を高める・社会生活につなげる)
各学部等	小学部	中学部	高等部
キャリア発達段階	小学部	中学部	高等部
学部目標	小学部	中学部	高等部
キャリア発達課題	小学部	中学部	高等部

各学部の目標・発達段階・発達課題に応じた研究テーマの設定と取り組み

各学部の発達段階や発達課題を学校全体で共通し、つながりを意識した指導支援を行うことで、学校教育目標の実現をめざす

研究グループ	小学部低学年	小学部高学年	中学部	高等部(福祉的就労)	高等部一般就労
グループの研究テーマ	児童の「人・物・こと」への関心・興味・意欲を高める ～遊びの指導とおおし～	自分の思いを表現するための授業づくり ～教科間のつながりを意識した授業実践とおおし～	「わかる!できた!やってみよう!」を大切に授業づくり ～生徒の実態に合わせた「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業実践とおおし～	作業学習における「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた「個性を伸ばす」ための支援方法	作業学習における「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた「個性を伸ばす」ための支援方法
研究対象領域等	遊びの指導	生活単元学習	各教科と行事等との関連	作業学習(校内実習)	作業学習(校内実習)
支援のポイント	様々な遊びの経験を通して興味関心を広げる支援 ○コミュニケーションの基礎を身に付ける支援	基本的な生活動作や生活習慣を身に付ける支援 ○生き生きとした活動の中で人間関係の基礎を形成する支援	基本的な社会生活能力を身につける支援 ○それぞれの自己表現力を高める支援 ○経験を広げ、自己有用感や自主性を育てる支援	今ある力を高める(活用できるようにする)支援 ○現実的な場面に対応できるように支援 ○長く働き続けるための支援(マナー、コミュニケーション能力、体力、相談する力、生活を楽しむ力)	今ある力を高める(活用できるようにする)支援 ○現実的な場面に対応できるように支援 ○長く働き続けるための支援(マナー、コミュニケーション能力、体力、相談する力、生活を楽しむ力)
主体的な姿	不安定な環境の中で、自ら興味関心を示し、取り組む姿勢	見通しをもって安心して参加し「やってみよう!」「できた!」と喜びを感じている姿	見通しをもって、自ら学習に取り組もうとしている姿	自分が今取り組むことを理解し、意欲的に取り組もうとする姿	見通しをもって活動に取り組む、あきらめずにがんばり続ける姿
対話的な姿	人・もの・こととの関係性に基づいて、因果関係を築き、刺激を享受し、楽しんでいる姿	一人一人の持つ表現方法で周りの人・もの・ことと関わり、わかりやすく、積極的に話している姿	一人一人の持つ表現方法で周りの人・もの・ことと関わり、わかりやすく、積極的に話している姿	必要に応じて、それぞれの関心・要求・相談に応じて話している姿	困ったときに自ら必要な支援を求め相談したり、解決しようとする姿
深い学びの姿	体験したことなどで自分なりの気づきを得て、よりよい生活につなげようとしている姿	学習した内容を自分の生活や他の教科の学習に活用しようとしている姿	授業とおおしして学んだことを日常生活や他の授業で活用し、生活を生き生きと楽しもうとしている姿	どんな場面でも、自分のすべき行動がわかり、落ちついて自分らしく生活する姿	「いつでも、どこでも、だれにでも」自分の思いを伝え、生き生きと生活する姿

各学部間のつながりや系統性の明確化、学部をこえて授業を見合うための視点、12年間を見通した指導・支援で子どもを最大限に伸ばす

## (2) 授業のチェックシートの作成と活用

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業づくりの観点を共有し指導を行うための「『主体的・対話的で深い学び』を進めるためのチェックシート（教師用）」と、児童生徒の「主体的な姿」「対話的な姿」「深い学びの姿」を実態を把握するための「観察チェックシート（児童生徒の姿）」を次のように作成し活用した。

### ① 「主体的・対話的で深い学び」を進めるためのチェックシート（教師側）

#### 1. 作成の方法

チェックシートの項目の作成にあたっては、「いわての授業づくり3つの視点」を参考に本校の児童生徒の実態と指導形態に合わせて再構成し作成をおこなった。つまり、あたたかい人間関係と学習規律を基盤とした学習集団をつくるための「環境」「かかわり」、視点1の「見通し」、視点2の「課題解決」、視点3の「振り返り」の5つの項目を設定し、項目毎に知的障がいや発達障がいのある児童生徒への指導・支援の手だてとして必要な内容を質問項目とした。

#### 2. ねらい

- ・ 「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりに必要なことの共通理解を進める。
- ・ 職員の実践を促すと共にその課題を分析し、授業改善につなげる。

#### 3. 実施方法

- ・ 6月と12月にアンケート方式で意識調査を行う。

#### 4. 質問項目及び調査用紙

チェックシートの質問項目は下の表のとおりである。

環境 ＜主体的＞	① 児童生徒が安心して（安定して）過ごせるような環境になるようにしている
	② トラブルが起こったときの対応をわかっている（例：パニック、問題行動）
	③ 児童生徒と教師の間に信頼関係ができています
	④ 児童生徒の一人一人の行動や表現の特徴を把握している
見通し （視点1） ＜主体的＞	① 今日のこの時間のねらいや目標を児童生徒にわかる言葉で伝えている
	② 今日のこの時間の評価規準（どの場面で何を見取るか）を伝えている
	③ T1, T2の役割が明確で、いつ誰が何をどうやればよいかお互いわかっている
	④ この題材の指導計画（何時間でどんなことをどうするか）を把握している
課題解決 （視点2） ＜対話的＞	① 児童生徒の実態にあった題材や課題の設定ができています（質・量）
	② 児童生徒が自分で考えたり、試行錯誤したりする場面を設定している
	③ 児童生徒が自分で気づいたり、発見・解決したりするよう支援している
	④ 友だちの様子や資料（もの・こと）から、自分の考えを広げられるよう支援している
振り返り （視点3） ＜主体的・深い学び＞	① 次の時間の内容などを伝えている
	② 達成感や満足感、学習内容の有用感などを感じられるようにしている
	③ 学んだことが、今の生活やこれからの生活にどう生かされるのかを伝えている
	④ 児童生徒一人一人の変容を把握し、記録している
かかわり ＜その他＞	① 児童生徒が理解できる言葉や方法で、シンプルに伝えている（たくさん話さない）
	② 児童生徒を呼ぶときには、「～さん」「～くん」と呼んでいる
	③ 児童生徒の成長や可能性を信じ、個々の能力を最大限に伸ばそうとしている（限界を決めない）
	④ 保護者や支援者にできるようになったことを伝えている（または担任に伝えている）

\*（ ）はいわての授業づくり3つの視点との関連 < >は「主体的・対話的で深い学び」との関連



## 5. 結果及び考察

### 1 全体

6月と12月に行った結果の各質問項目の全学部合計の回答の割合を下の表に示す。

項目	「主体的・対話的で深い学び」を進めるためのチェックシート（教師側）・全体 質問項目（自分がしていると思うかどうか）	6月（53人中）				12月（49人中）			
		そう思う	だいたい そう思う	あまり思 わない	思わない	そう思う	だいたい そう思う	あまり思 わない	思わない
環境	①児童生徒が安心して（安定して）過ごせるような環境になるようにしている	47.2%	49.1%	3.8%	0.0%	59.2%	38.8%	2.0%	0.0%
	②トラブルが起こったときの対応をわかっている（例：パニック、問題行動）	20.8%	60.4%	15.1%	3.8%	38.8%	49.0%	12.2%	0.0%
	③児童生徒と教師の間に信頼関係ができています	26.4%	67.9%	5.7%	0.0%	36.7%	57.1%	6.1%	0.0%
	④児童生徒の一人一人の行動や表現の特徴を把握している	26.4%	62.3%	9.4%	1.9%	34.7%	61.2%	4.1%	0.0%
	平均	30.2%	59.9%	8.5%	1.4%	42.3%	51.5%	6.1%	0.0%
見 通 し	①今日のこの時間のねらいや目標を児童生徒にわかる言葉で伝えている	25.0%	55.8%	15.4%	0.0%	33.3%	60.4%	6.3%	0.0%
	②今日のこの時間の評価規準（どの場面で見取るか）を伝えている	5.8%	34.6%	46.2%	7.7%	14.6%	56.3%	27.1%	2.1%
	③T1,T2の役割が明確で、いつ誰が何をどうやればよいかお互いわかっている	13.5%	65.4%	17.3%	1.9%	14.6%	70.8%	12.5%	0.0%
	④この題材の指導計画（何時間でどんなことをどうするか）を把握している	19.2%	59.6%	15.4%	1.9%	33.3%	56.3%	8.3%	0.0%
	平均	15.9%	53.8%	23.6%	2.9%	24.0%	60.9%	13.5%	0.5%
課 題 解 決	①児童生徒の実態にあった題材や課題の設定ができています（質・量）	20.8%	66.0%	5.7%	1.9%	29.2%	64.6%	0.0%	2.1%
	②児童生徒が自分で考えたり、試行錯誤する場面を設定している	20.8%	62.3%	9.4%	3.8%	24.5%	65.3%	6.1%	4.1%
	③児童生徒が自分で気づいたり、発見・解決したりするよう支援している	18.9%	64.2%	11.3%	1.9%	26.5%	65.3%	4.1%	4.1%
	④友だちの様子や資料（もの・こと）から、自分の考えを広げられるよう支援している	17.0%	47.2%	26.4%	5.7%	14.6%	68.8%	12.5%	4.2%
	平均	19.3%	59.9%	13.2%	3.3%	23.7%	66.0%	5.7%	3.6%
振 り 返 り	①次の時間の内容を伝えていく	38.5%	44.2%	9.6%	3.8%	38.8%	57.1%	2.0%	2.0%
	②達成感や満足感、学習内容の有用感などを感じられるようにしている	25.0%	67.3%	5.8%	0.0%	34.7%	61.2%	2.0%	2.0%
	③学んだことが、今の生活やこれからの生活にどう生かされるのかを伝えている	17.3%	44.2%	32.7%	3.8%	18.4%	51.0%	28.6%	2.0%
	④児童生徒一人一人の変容を把握し、記録している	20.8%	43.4%	24.5%	7.5%	25.0%	54.2%	18.8%	2.1%
	平均	25.4%	49.8%	18.2%	3.8%	29.2%	55.9%	12.8%	2.1%
か か わ り	①児童生徒が理解できる言葉や方法で、シンプルに伝えている（たくさん話さない）	20.8%	69.8%	9.4%	0.0%	28.6%	61.2%	16.3%	0.0%
	②児童生徒を呼ぶときには、「～さん」「～くん」と呼んでいる（呼び捨て、ニックネームで呼ばない）	37.7%	47.2%	13.2%	1.9%	43.8%	52.1%	12.5%	0.0%
	③児童生徒の成長や可能性を信じ、個々の能力を最大限に伸ばそうとしている（限界を決めない）	26.4%	62.3%	11.3%	0.0%	35.4%	58.3%	22.9%	2.1%
	④保護者や支援者にできるようになったことを伝えている（または担任に伝えている）	49.1%	49.1%	1.9%	0.0%	42.9%	44.9%	14.3%	2.0%
	平均	33.5%	57.1%	9.0%	0.5%	37.6%	54.1%	16.5%	1.0%

数値はそれぞれの回答数を全職員数で割った割合(%)を表す

上の表から読み取れる全体的な傾向について、以下に<結果>と<考察>としてまとめる。

#### <結果>

- i) 5つの項目すべて、6月に比して12月で「そう思う」の回答率が上がっている。
- ii) 5つの項目で「そう思う」の回答率が30%以上であったのは、2回とも「環境」と「かかわり」であった。
- iii) 5つの項目で「そう思う」の回答率が低かった回答は、2回とも「見通し」と「課題解決」であった。
- iv) 5つの項目で「そう思う」と「だいたいそう思う」の合計は2回とも70%以上であった。
- v) 6月の質問項目で「そう思う」の回答率が高かったものは順に「かかわり④49.1%」「環境①47.2%」「振り返り①38.5%」であった。
- vi) 12月の質問項目で「そう思う」の回答率が高かったものは順に「環境①59.2%」「かかわり②43.8%」「かかわり④42.9%」であった。
- vii) 6月の質問項目で「あまり思わない」の回答率が高かったものは順に「見通し②46.2%」「振り返り③32.7%」「課題解決④26.4%」であった。
- viii) 12月の質問項目で「あまり思わない」の回答率が高かったものは順に「振り返り③28.6%」「見通し②27.1%」「かかわり③22.9%」であった。
- ix) 6月と12月を比して、最も「そう思う」の回答率が上がったのは「環境②20.8%→38.8%(18.0%アップ)」であった。
- x) 6月と12月を比して、最も「あまり思わない」の回答率が下がったのは「見通し②46.2%→27.1%(19.1%ダウン)」であった。



<考察>

- i)より、職員全体としては「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業づくりの観点の共有が進み、6月と12月の半年でより意識が高まったと考えられる。
- ii) v) vi) ix)より、児童生徒との信頼関係や安心感、また職員同士や保護者との関係性を大切にしている職員が多く、また半年の間でポイントがアップしていることから、あたたかい人間関係を基盤とした学習集団を作ろうとする意識が高いことが考えられる
- iv)より、職員全体としては概ねすべての項目について意識して取り組んでいる傾向があると考えられる。
- ix)より、「トラブルへの対応」は6月から12月までの間に児童生徒の理解が深まり、適切に対応できていると感じている職員が多くなっていることが考えられる。
- x)より、「評価規準を伝えること」の意識が向上したと考えられる。これは、次項以降で述べる新学習指導要領に対応した新様式の学習指導案の作成等を通して、3観点の目標設定や単元計画についての学びが深まったためではないかと思われる。
- iii) vii) viii)より、本校の全体的な課題としては主に「見通し」と「課題解決」であることが考えられる。「見通し」では、「評価規準を伝えること」「T1、T2の役割分担」、「課題解決」では、「試行錯誤する機会」「ものやことから自分の考えを広げる機会」が特に評価が低かったことから、授業計画や打ち合わせが十分でないことや、対話的な学習を進めるための教材研究や障がいの程度が重い児童生徒への指導理論や方法が不足していることが考えられる。
- 「学びを生活につなげる」ということが、本校の「主体的・対話的で深い学び」の大きなねらいであることから、生活に根ざした題材の設定や身についた力が生活に生かされていることへの気づきを促す支援をさらに意識して行う必要があると思われる。
- 「見てまねること」やメタ認知に課題がある児童生徒が多いことから、他者との関わりから気づきを得たり、考えを深めるということが難しい児童生徒もいることが考えられる。しかし、すべての人は環境や他者との関わりの中で成長するものであることから、発達段階や特性に応じた支援をさらに心がける必要があると思われる。
- 「集計表」の「そう思う」を見ると、ほとんどの項目で50%以下であった。「だいたいそう思う」というのは「そうでないこともある」という要素が入っていることから、「そう思う」という回答がさらに増えるように、日常的に意識をすることが必要であると考えられる。

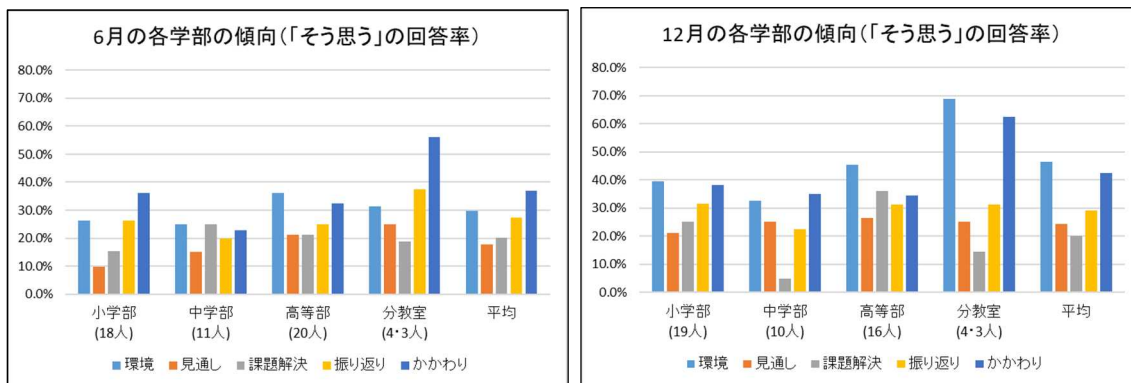
2 各学部の結果（概要）

1) 項目毎の学部間の全体的な傾向

下の表は「環境」「見通し」「課題解決」「振り返り」「かかわり」の5つの項目について6月と12月の「そう思う」の回答率を学部毎にまとめたものである。各学部の回答数による割合であるので、前項の各項目の平均の値とは異なっている。また次ページのグラフはこの表を棒グラフにしたものである。

6月 「そう思う」	小学部 (18人)	中学部 (11人)	高等部 (20人)	分教室 (4・3人)	平均	12月 「そう思う」	小学部 (19人)	中学部 (10人)	高等部 (16人)	分教室 (4・3人)	平均
環境	26.4%	25.0%	36.3%	31.3%	29.7%	環境	39.5%	32.5%	45.3%	68.8%	46.5%
見通し	9.7%	15.0%	21.3%	25.0%	17.7%	見通し	21.1%	25.0%	26.6%	25.0%	24.4%
課題解決	15.3%	25.0%	21.3%	18.8%	20.1%	課題解決	25.0%	5.0%	35.9%	14.6%	20.1%
振り返り	26.4%	20.0%	25.0%	37.5%	27.2%	振り返り	31.6%	22.5%	31.3%	31.3%	29.1%
かかわり	36.1%	22.7%	32.5%	56.3%	36.9%	かかわり	38.2%	35.0%	34.4%	62.5%	42.5%

\*分教室の(4・3人)は質問項目の回答に一部無回答が含まれていることを示す。



### <この表とグラフから読み取れる各学部の傾向>

#### <小学部>

小学部では、6月と12月で各項目の傾向はほぼ同じであるが、特に「環境」「見通し」で回答率が上がっており、各項目間の得点率の差が少なくなっている。5つの項目の中で最も低い項目は6月と12月とも「見通し」であった。高い項目は「環境」と「かかわり」であった。

#### <中学部>

中学部では、6月は「見通し」が他の4項目よりやや低いが項目間の差は少なかったが、12月では「課題解決」が下がり、「環境」と「かかわり」の回答率が上がっている。5つの項目の中で最も低い項目は6月が「見通し」、12月が「課題解決」であった。高い項目は6月が「環境」「課題解決」、12月が「かかわり」と「課題解決」であった。

#### <高等部>

高等部では、6月は「環境」と「かかわり」がやや高かったが、12月では「課題解決」と「振り返り」の回答率が上がり、項目間の差が縮まっている。5つの項目の中で低い項目は6月が「見通し」と「課題解決」、12月では「見通し」であった。高い項目は6月が「環境」と「かかわり」、12月が「環境」と「課題解決」であった。

#### <分教室>

分教室では、6月は「かかわり」が他学部と比べても大きく目立って高かったが、12月では、「環境」の回答率も大きく上がり、「環境」と「かかわり」の回答率の高さが目立っている。5つの項目の中で最も低い項目は6月と12月とも「課題解決」であった。高い項目は6月が「かかわり」と「振り返り」、12月が「環境」と「かかわり」であった。

## 2) 質問項目毎の各学部の結果

次ページの表は、6月と12月の各学部毎の各質問項目における「そう思う」「だいたいそう思う」の結果と「そう思う」と「だいたいそう思う」の結果の合計を足したものである。

1)では、各項目の「そう思う」の回答率の平均で、各学部の大まかな傾向をまとめた。各質問項目の結果をまとめるにあたっては、より正確な傾向をつかむために「そう思う」と「だいたいそう思う」の肯定的な評価を表す回答を合わせてまとめた。

表の中の網掛けは、「そう思う」と「だいたいそう思う」の結果の合計が80.0%未満の項目である。

\* 網掛けは数値が80.0%未満のもの。

教師側(意識調査) 6月結果		「そう思う」「だいたいそう思う」の合計				
		小 (18人)	中 (11人)	高 (20人)	分 (4・3人)	全体
環境	①児童生徒が安心して(安定して)過ごせるような環境になるようにしている	100.0%	100.0%	90.0%	100.0%	97.5%
	②トラブルが起こったときの対応をわかっている(例:パニック、問題行動)	88.9%	63.6%	80.0%	100.0%	83.1%
	③児童生徒と教師の間に信頼関係ができています	94.4%	100.0%	90.0%	100.0%	96.1%
	④児童生徒の一人一人の行動や表現の特徴を把握している	94.4%	81.8%	85.0%	100.0%	90.3%
	平均	94.4%	86.4%	86.3%	100.0%	91.8%
見直し	①今日のこの時間のねらいや目標を児童生徒にわかる言葉で伝えている	77.8%	90.0%	85.0%	66.7%	79.9%
	②今日のこの時間の評価規準(どの場面で見取るか)を伝えている	27.8%	30.0%	55.0%	66.7%	44.9%
	③T1,T2の役割が明確で、いつ誰が何をどうやればよいかお互いわかっている	88.9%	80.0%	70.0%	100.0%	84.7%
	④この題材の指導計画(何時間でどんなことをどうするか)を把握している	72.2%	70.0%	90.0%	100.0%	83.1%
	平均	66.7%	67.5%	75.0%	83.3%	73.1%
課題解決	①児童生徒の実態にあった題材や課題の設定ができています(質・量)	88.9%	90.0%	95.0%	50.0%	81.0%
	②児童生徒が自分で考えたり、試行錯誤する場面を設定している	88.9%	70.0%	90.0%	75.0%	81.0%
	③児童生徒が自分で気づいたり、発見・解決したりするよう支援している	77.8%	90.0%	90.0%	75.0%	83.2%
	④友だちの様子や資料(もの・こと)から、自分の考えを広げられるよう支援している	55.6%	40.0%	85.0%	75.0%	63.9%
	平均	77.8%	72.5%	90.0%	68.8%	77.3%
振り返り	①次の時間の内容などを伝えている	77.8%	80.0%	95.0%	66.7%	79.9%
	②達成感や満足感、学習内容の有用感などを感じられるようにしている	100.0%	90.0%	95.0%	66.7%	87.9%
	③学んだことが、今の生活やこれからの生活にどう生かされるのかを伝えている	55.6%	60.0%	75.0%	33.3%	56.0%
	④児童生徒一人一人の変容を把握し、記録している	72.2%	60.0%	55.0%	100.0%	71.8%
	平均	76.4%	72.5%	80.0%	56.3%	71.3%
かかわり	①児童生徒が理解できる言葉や方法で、シンプルに伝えている(たくさん話さない)	94.4%	72.7%	95.0%	100.0%	90.5%
	②児童生徒を呼ぶときには、「～さん」「～くん」と呼んでいる(呼び捨て、ニックネームで呼ばない)	88.9%	63.6%	90.0%	100.0%	85.6%
	③児童生徒の成長や可能性を信じ、個々の能力を最大限に伸ばそうとしている(限界を決めない)	100.0%	72.7%	85.0%	100.0%	89.4%
	④保護者や支援者にできるようになったことを伝えている(または担任に伝えている)	100.0%	100.0%	95.0%	100.0%	98.8%
	平均	95.8%	77.3%	91.3%	100.0%	91.1%

教師側(意識調査) 12月結果		「そう思う」「だいたいそう思う」の合計				
		小 (19人)	中 (10人)	高 (16人)	分 (4・3人)	全体
環境	①児童生徒が安心して(安定して)過ごせるような環境になるようにしている	100.0%	90.0%	100.0%	100.0%	97.5%
	②トラブルが起こったときの対応をわかっている(例:パニック、問題行動)	89.5%	90.0%	81.3%	100.0%	90.2%
	③児童生徒と教師の間に信頼関係ができています	94.7%	90.0%	93.8%	100.0%	94.6%
	④児童生徒の一人一人の行動や表現の特徴を把握している	89.5%	100.0%	100.0%	100.0%	97.4%
	平均	93.4%	92.5%	93.8%	100.0%	94.9%
見直し	①今日のこの時間のねらいや目標を児童生徒にわかる言葉で伝えている	84.2%	100.0%	100.0%	100.0%	96.1%
	②今日のこの時間の評価規準(どの場面で見取るか)を伝えている	68.4%	60.0%	81.3%	66.7%	69.1%
	③T1,T2の役割が明確で、いつ誰が何をどうやればよいかお互いわかっている	89.5%	80.0%	81.3%	100.0%	87.7%
	④この題材の指導計画(何時間でどんなことをどうするか)を把握している	94.7%	90.0%	87.5%	66.7%	84.7%
	平均	84.2%	82.5%	87.5%	83.3%	84.4%
課題解決	①児童生徒の実態にあった題材や課題の設定ができています(質・量)	89.5%	90.0%	100.0%	100.0%	94.9%
	②児童生徒が自分で考えたり、試行錯誤する場面を設定している	78.9%	90.0%	100.0%	100.0%	92.2%
	③児童生徒が自分で気づいたり、発見・解決したりするよう支援している	84.2%	90.0%	100.0%	100.0%	93.6%
	④友だちの様子や資料(もの・こと)から、自分の考えを広げられるよう支援している	78.9%	90.0%	87.5%	66.7%	80.8%
	平均	82.9%	90.0%	96.9%	91.7%	90.4%
振り返り	①次の時間の内容などを伝えている	94.7%	100.0%	100.0%	75.0%	92.4%
	②達成感や満足感、学習内容の有用感などを感じられるようにしている	94.7%	90.0%	100.0%	100.0%	96.2%
	③学んだことが、今の生活やこれからの生活にどう生かされるのかを伝えている	57.9%	70.0%	87.5%	50.0%	66.3%
	④児童生徒一人一人の変容を把握し、記録している	84.2%	100.0%	56.3%	100.0%	85.1%
	平均	82.9%	90.0%	85.9%	81.3%	85.0%
かかわり	①児童生徒が理解できる言葉や方法で、シンプルに伝えている(たくさん話さない)	89.5%	90.0%	87.5%	100.0%	91.7%
	②児童生徒を呼ぶときには、「～さん」「～くん」と呼んでいる(呼び捨て、ニックネームで呼ばない)	94.7%	100.0%	93.8%	100.0%	97.1%
	③児童生徒の成長や可能性を信じ、個々の能力を最大限に伸ばそうとしている(限界を決めない)	89.5%	100.0%	93.8%	100.0%	95.8%
	④保護者や支援者にできるようになったことを伝えている(または担任に伝えている)	94.7%	90.0%	87.5%	50.0%	80.6%
	平均	92.1%	95.0%	90.6%	87.5%	91.3%

## 〈質問項目の各学部の特徴的な結果と考察〉

### 〈小学部〉

小学部で、6月と12月のどちらとも100%であったのは「環境①」であった。6月で低かった質問項目は「見通し②27.8%」「課題解決④55.6%」「振り返り③55.6%」であった。12月で低かった質問項目は「振り返り③57.9%」「見通し②68.4%」であった。質問項目で80%未満であった質問項目は6月が8（平均を除く、以下同じ）、12月が4と半減した。

6月に比して12月では全体的に大きく数値が上がっていることから、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業づくりの意識が向上したと言える。小学部の特徴としては、児童が安心して過ごせるような環境作りを特に大切にしていること、達成感や満足感を得られるようにしていること、保護者や支援者間との関係を大切にしていることがわかった。「見通し②」については全体の中では低かったものの、6月に比して大きく値が上がっていることから、新様式での指導案の作成等を通して題材計画や評価計画の理解が進んだものと思われる。「振り返り③」の学んだことがどのように生活に生かされているかを伝えることについては、基礎的で汎用的な学習内容が多い小学部においては何かに絞って伝えることが難しいとも考えられるが、教科等間のつながりや題材のつながりを意識していくことで具体的にどのように学びが繋がっているかを児童にもイメージできるように伝えることができるようになるのではないかと考える。

### 〈中学部〉

中学部で、6月と12月のどちらとも100%であったものはなかったが、12月では100%の質問項目が2から4への大きく増え、12月ではほとんどの質問項目が90%以上と高くなっている。6月で低かった質問項目は「見通し②30.0%」「課題解決④40.0%」であった。12月で低かったのは「環境①」であった。6月で低かった質問項目は「見通し②60.0%」「振り返り③70.0%」であった。

6月に比して12月では全体的に大きく数値が上がっていることから、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業づくりの意識が向上したと言える。中学部の特徴として、「振り返り④」が12月で100%と6月に比して40%アップしていることや、「課題解決④」が12月で90%と6月に比して50%アップ（全学部で一番高い）ことから、生徒一人一人の変容を丁寧に見取ることができており、また、人やモノとの関わりから自分の考えを広げられるよう工夫している職員が多いことがわかった。中学部で最も低かった「見通し②」については、6月に比して大きく向上しているものの、作業学習や生活単元学習など大きな時間のまとまりの中で取り組むことが多いことから、1単位時間の評価規準（今の時間では何がどこまでできればいいのか）ということを明確にしづらいということがあるためと思われる。現在行っている学習課題を分析し、目標を細分化する（スモールステップ）ことで、より具体的な目標を示すことができるようになるのではないかと考える。

### 〈高等部〉

高等部では、6月に100%のものはなかったが、12月では100%の質問項目が8と大きく増えた。6月で低かった質問項目は「見通し②」「振り返り④55.0%」であった。12月で低かったのは「振り返り④」のみであり、他の質問項目はすべて80%を超えていた。

6月に比して12月では全体的に大きく数値が上がっていることから、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業づくりの意識が向上したと言える。高等部の特徴として、他学部よりも「見通し②」と「振り返り③」が高いことがある。これは、「見通し②」では発達段階が高いことや教科的な学習が多いことから、1単位時間における学習内容が明確であり評価規準がわかりやすいこと、「振り返り③」では高等部は社会生活への出口であることから、卒業後の生活を意識した学習が多く、必然的に学んだことと生活の関連を伝える機会が多いことが考えられる。高等部で最も低く、また他学部と比べても特に低かったのは「振り返り④」である。これは高等部の学習グループの人数が他学

部よりも多いことや下校時間が遅いこと、生徒指導や進路指導が頻回であることなどで生徒の様子を記録する時間の確保が難しいためと考えられる。対応としては毎日の記録は進捗などごく最低限のものにし、1~2ヶ月などの間隔でチェックシートなど一定の規準を設けて変容を見る機会を設けるや、主に担当する生徒を指導者の中で分担し、記録する係を分けるなどが考えられる。

#### 〈分教室〉

分教室では、「環境」と「かわり」に関することが6月12月ともほぼ100%であった。6月で低かった質問項目は「振り返り③33.3%」「課題解決①50.0%」であった。12月で低かった質問項目は「振り返り③50.0%」「かわり④50.0%」であった。

6月に比して12月では全体的に大きく数値が上がっていることから、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業づくりの意識が向上したと言える。分教室の特徴としては、「環境」と「かわり」を重視していること、「見通し③」が高いことからT1、T2の役割が明確であること、6月12月とも「振り返り④」が100%であることから、授業や生徒の変容の記録の取り方が確立していることが考えられる。分教室では自立活動を中心として教育課程であること、入院中の生徒が対象であること、生徒が高齢であることなどから、教育活動に制限があるため、質問項目によっては難しいものがあると思われる。しかし、分教室にとってのより良い「主体的・対話的で深い学び」の姿ということについて理解を深めることで、たとえば、「振り返り③」では、分教室での学びや経験が、その生徒のその後の人生の支えや喜びになること、思い出や話題として生活を豊かにしてくれるものであることをより願い、その思いを伝えることで達成していくことも可能ではないかと考える。

#### ＜「授業のチェックシートの作成と活用」のまとめ＞

- 「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりに必要なことの共通理解と意識を高めることができた。
- 学校全体、学部毎の課題と特徴を捉えることができた。
- 「そう思う」という回答がより増えるための手だてを検討すること。
- チェックシートの今後の活用について検討し、授業改善にさらに役立つようにすること。



## ② 「主体的・対話的で深い学び」観察チェックシート（児童生徒の姿）

### 1. 作成の方法

チェックシートの項目の作成にあたっては、教師側の「主体的・対話的で深い学び」を進めるためのチェックシートの作成と同様に「いわての授業づくり3つの視点」を参考に本校の児童生徒の実態を鑑みて再構成し作成をおこなった。つまり観察チェックシートでは、あたたかい人間関係と学習規律を基盤とした学習集団をつくるための「環境」、視点1の「見通し」、視点2の「課題解決」、視点3の「振り返り」の4つの項目を設定し、項目毎に知的障がいや発達障がいのある児童生徒にとって、具体的にどのような姿（行動や様子）が見られれば、「主体的な姿」「対話的な姿」「深い学びの姿」が見られたと評価できるかがわかるように作成を行った。

しかし、これらの具体的な姿は、発達段階や教科等が異なると求められる姿や様子も変わってくることから、ベースとなる様式（卒業時まで身に付けたい姿）を提示し、各研究グループが活用する際には実態に応じて手直しをしてもらうこととした。

### 2. ねらい

- ・「主体的・対話的で深い学び」の姿が児童生徒に見られているかを観察によって評価できるようにする。
- ・グループ内の授業を見合う時の共通の視点として活用する。

### 3. 活用方法（例）

- ・各研究グループで活用し、それぞれのグループの児童生徒の傾向（課題）をつかんだり、個々の児童生徒の課題等を把握したりするために使う。
- ・自分の授業の振り返りに使う。
- ・授業を参観する際に使用する。

### 4. 各学部段階等に合わせた検討

活用にあたっては、発達段階等に応じた内容や表現が必要になるため、各研究グループで以下の確認次項をもとに検討・作成した。検討の結果については各グループの実践報告を参照のこと。

#### <確認事項>

- ・各グループの研究テーマによってチェック項目を増やしてもよい。
- ・基本的に1単位時間の様子を記録するが、授業の一部を見たときのチェックでもよいし、単元全体でのチェックでもよい（その日によって見られない活動もあるため）。
- ・児童生徒の実態によってはチェックできない項目がある（重度重複など）。
- ・児童生徒の様子（ ）には、各グループの児童生徒の実態に応じた予想される児童生徒の姿を入れるなどし、どのような状態だとその項目が達成されているのかを示すようにすると、さらに正確な評価ができると思われる（課題②：ときどき手が止まっても簡単な声で再開できる、課題③：友だちが発表した後に手をたたいている → 推測ではなく児童生徒の行動でチェックできるようにする）。
- ・最終的には、各グループの実態にあった児童生徒の姿をみとるためのチェックシートとなり、来年度以降も使用できるものにしたい（来年度の授業参観シートにするなど）。



### 5. チェック項目と様式（ベースとなるもの）

ベースとしたチェック項目は下の表のとおりである。

<b>環境</b> <主体的>	① 教室内で落ち着いていて、リラックスできている
	② いつもと違うことが起きて、だいたい落ち着いて取り組むことができている
	③ 教師を信頼している様子が見られる
	④ 教師や教材、友だち、環境とのかかわりを楽しんでいる
<b>見通し</b> (視点1) <主体的>	① 授業に向かうかまえができている
	② 今日、やることがわかっている
	③ 今日、やることの自分のなりの目標がわかっている
	④ 困ったときや次にどうすればよいかわかっている
<b>課題解決</b> (視点2) <主体的・対話的>	① 課題に自分で取り組んでいる
	② 自分で工夫して取り組んだり、あきらめないで取り組んだりしている
	③ 友だちの取り組みを見たり、話を聞いたりすることができている
	④ 友だちの様子や資料を手がかりにして、自分のものにしようとしている
<b>振り返り</b> (視点3) <主体的・深い学び>	① 今日の学習について振り返る様子が見られる
	② これからの学習に期待している様子が見られる
	③ 題材の終わりに取り組んだ内容を話したり、成果をまとめたりすることができている
	④ 他の時間に学んだ(学ぶ)ことと関連づけたり、思い出したりしている

\* ( )はいわての授業づくり3つの視点との関連、 <>は「主体的・対話的で深い学び」との関連

### 6. 各研究グループでの活用結果

各研究グループでの活用の様子と実践の結果については、各グループの実践報告で詳しく述べる。分教室、小学部、中学部では、児童生徒の実態や研究対象とした教科等に合わせて内容が検討され実践した。

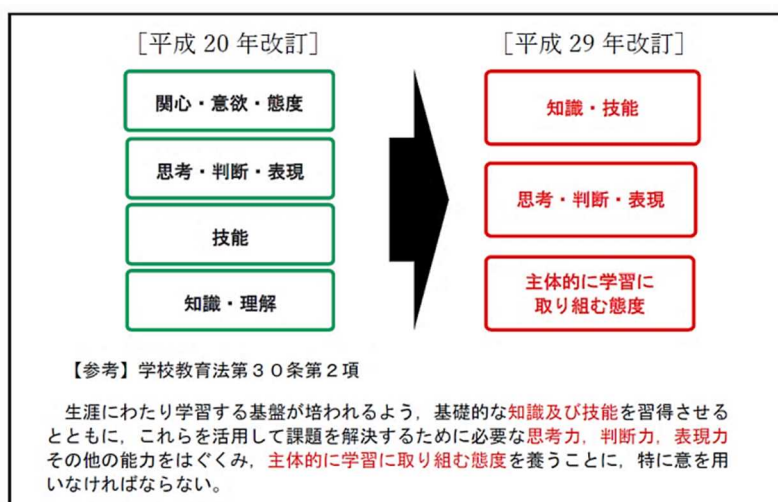
#### <「主体的・対話的で深い学び」観察チェックシートの作成と活用のまとめ>

- 「主体的・対話的で深い学び」の児童生徒の姿について、各学部段階や教科等における具体的な姿を検討することで、評価に関する手だてを充実することができた。
- チェックシートを活用することで、評価の規準をより明確にすることができ、個別の手だてを具体的に考えたり、同じ視点で指導者が評価したりできるようになった。
- 授業によって見られる姿が異なっていることから、有効な手だてを指導者間で共有できるような機会を検討すること。
- より実態や教科等の特性に即した評価ができるように工夫すること。

### (3) 新学習指導要領に対応した学習指導案の様式の作成

#### ① 新学習指導要領に対応した学習指導案のポイント

##### 1. 新様式作成の理由



5月に実施した全校研修会では、新学習指導要領に対応する学習指導案の作成についても研修を行った。学習指導案は統一された様式や書き方が決まっているわけではないが、今回の改訂では左図のように4観点から3観点で評価するようになったことや「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った指導と評価の一体化を進めていくためには、授業の設計図である学習指導案についても

様式を見直すことが必要であると考えた。また、今回の学習指導要領の改訂では、より学習指導要領の目標や内容に準拠した指導や評価が求められるようになったことから新様式の作成が必要と考えた。

##### 2. 新様式の改善ポイント

新様式の作成にあたっては、岩手県立総合教育センター学習指導案様式（2020年度版）を参考にした。当センターの様式は、「教科」における統一の指導案様式として、また「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」を参考として作成されているため、本校においても参考にして作成すべきと考えた。ただし、本校は特別支援学校であり、個別の支援を必要とする児童生徒が在籍していることから、個別の目標や手だてについても触れる項目を設けるなど本校独自の項目もある。以下に改善のポイントについて概要をまとめる。具体的な記入方法や作成例については【資料1】を参照のこと。

##### <改善のポイント>

- ・ 「内容のまとめり」を設定し、学習指導要領との関連を明記することとした。
- ・ 学習指導要領の目標や内容、学習指導要領解説等を踏まえて「単元（題材）の目標」作成し、児童生徒の実態、前単元（題材）までの学習状況等を踏まえて「単元（題材）の評価規準」を作成する、という流れに沿い、「3単元（題材）の目標」「4単元（題材）について」「5単元（題材）の評価規準」という項目順とした。
- ・ 「児童（生徒）観」「教材観」「指導観」については、必要な情報に留めるため、箇条書きでの記述とした。本校においては、「児童（生徒）について」「題材（教材）について」「支援について」とすることとした。
- ・ 数単位時間の学習計画や評価計画を見通した指導が必要とされていることから、「単元の指導と評価の計画」を作成することとした。
- ◇ 個別の支援を必要としている特別支援学校として、「単元（題材）に関する児童（生徒）の実態と手だて」を作成することとした。
- ◇ 個別の支援を必要としている特別支援学校として、本時の指導には、「本時の個別の目標及び支援」を作成する

こととした。

- ◇「指導上の留意点」については、教師のすることを明確にするため語尾を「～する」に統一した。
- ◇見やすく分かりやすい体裁となるよう文字の大きさやフォントなどを統一した。また、略案ではA4裏表1枚に納めることとした。

## ② 新様式の学習指導案作成

今年度の研究授業においては新様式による学習指導案を作成することとした。作成してみたの成果や課題については次章の各研究グループの取り組みを参照のこと。新様式の学習指導案作成のねらい、実践、主な結果について以下にまとめる。

### <ねらい>

- ・自分が担当する教科等に関する新学習指導要領等を研修する機会とする。
- ・新学習指導要領に対応した様式で作成してみることで、児童生徒に育成したい資質・能力をどのように授業の中で身につけさせるのかということを考える機会とする。
- ・「主体的・対話的で深い学び」に関する理解を深める。

### <実践>

- ・各研究グループから1つ以上の略案を作成し、各グループで研究授業を行う。
- ・作成後は研究担当者が書き方例に合っているかどうかチェックを行う。
- ・全校授業検討会の資料とする。
- ・各研究グループで新学習指導要領を作成してみたの成果と課題をあげ、改善に役立てる。

### <結果（概要）>

- ・各研究グループで1つ以上の略案を作成し、検討することができた。
- ・作成をとおして、各教科の目標や内容についての理解が深まった。
- ・学習指導案の作成例を示したことで、スムーズに作成ができた。
- ・授業の展開（指導内容）から、内容のまとまりや単元の目標を考えるケースでは、ねらいが明確にならないケースが多く見られた。
- ・教科によっては、教科の特性に応じた目標の設定や書き方があり、免許教科でない授業の指導案の作成に苦慮している様子が見られた。

### 学習指導案の新様式の作成と活用のまとめ

- 新学習指導要領に対応した学習指導案の作成によって、各教科等のねらいや内容、3観点による評価についての具体的な理解を深めることができた。
- 内容のまとまりを意識した作成がポイントであることから合わせた指導における内容のまとまりを整理する必要がある。
- 各教科の特性についての理解を深める必要がある。

### 3 授業見学期間の実施

#### (1) 実施方法

本校は、小・中学部（本校舎）、分教室（病院内）、高等部（釜石高校内）と校舎が分かれていることから、他学部の様子を見る機会が非常に限られているため、他学部の実態やどのような学習が行われているかをお互いが知ることに難しい状況にある。そこで、学部間の実態共有や授業改善のヒントを得るための授業見学期間を年間行事に位置づけ実施している。今年度は、下図のような授業参観シートを作成・活用することで、学部間の意見交換等も行えるように工夫した。ねらい、実施期間、実施方法については以下のとおりである。

<ねらい>

- ・授業見学をとおして、お互いを知る。
- ・授業見学をとおして、相互の情報を共有し連携を図る。

<実施期間>

6月 1日(月)～6月12日(金)

<実施方法>

- ・各学部の週案（教務部）を予め提示し、空き時間等を利用して見学を行う。
- ・授業参観シートに記入をしていただき、各学部の実態共有や授業改善のヒントを得る。
- ・授業参観シートに記入していただいた内容は、グループごとにまとめる。  
→ 質問や意見が出た場合は、グループから回答をもらう。

#### 令和2年度 授業見学期間 授業参観シート

参観日	6月 日 ( )	参観者所属	小学部 ・ 中学部 ・ 高等部 ・ 分教室
-----	----------	-------	-----------------------

<参観授業①> 参観していた時間帯： 時 分頃 ～ 時 分頃

学部・学年等	教科名等
【学んだこと・参考になったこと】 教室環境、子どもへの関わり方、授業の展開、教材・教具 など	
【教えてほしいこと・支援のアイデア等】 児童生徒理解や学部間の共通理解の促進、提案、感想	

## (2) 結果

2週間の参観期間で授業参観シートを記入・提出した職員（のべ人数）は、小学部 21 名、中学部 7 名、高等部 13 名、分教室 4 名であった。授業参観シートで寄せられた意見等は、小学部 36 件、中学部 38 件、高等部 19 件、分教室 8 件であった。以下に寄せられた意見等をいくつか紹介する。

参観学部	学年等	教科名等	参観者	学んだこと 参考になったこと	教えてほしいこと アイディア	回答
小学部	23年生	音楽	中	即時評価で、できたことをすぐに褒めているところが良かった。	リトミックで、先生もリズムに乗って（大げさに）歩くと、子どもたちもより曲の雰囲気に乗れるのかなと思いました。 【提案】	場所が狭いためにあまり大きく動けないということもありますが、子供たちが雰囲気に乗れるように盛り上げたいと思います。
小学部	高学年	生単	高	4年2組のろう下の掲示物のカレンダーや行事の感想ファイル、とても工夫されていると思いました。見通しにもふりかえりにも活用できそうで、参考になりました。	スライドでふりかえったあと、どんなふうに、次につなげていくのかなあとと思いました。	事後指導の後には各学年や学級で個人ごとに振り返りで絵を描いたり、作文を書いたり、写真を使ってまとめたりという活動をします。全体の事後指導ではその前段階として、行事の全体を思い出し、思い出を共有することを狙っています。
中学部	重複	自活	小	生徒の動きでできあがったものを、「偶然の産物」として受け入れていて良かった。重複の子のそういった動きを大切にしたい。	選択肢を増やしたらどんな反応をするのかな？	基本的に2択で活動を進めています。3択にする場合もあります。少し迷ってしまう様子もありますが、選ぶことができます。
中学部	家庭班	実習	高	家庭班の出来高表が見やすく貼られていて、よかったです。マスク作りを手ぬい(刺繍)で行えるよう、よく工程が工夫されていると思いました。	紙工班は、紙すきという題材で高等部とつながっているのですが、中と高の違いや系統性はどのようになっているのでしょうか。	中学部と高等部では、今のところ連携しておりません。中学部では是非、中・高の連携を図っていきたいと思います。
高等部	全体	音楽	中	「鑑賞ノート」を使うことで、音楽を聴く際の手掛かりとなっていて良かった。	「鑑賞ノート」に感想などを記入し、友達と意見交流できれば、より学びが深まるかなと思いました。 【提案】	そのとおりですので、今後の課題にしたいと思います。
高等部	2年生	生単	中	実態に合わせたものが準備されていたこと。(器用な生徒にはペーパークラフト、型抜きをして数字の順番に組み立てるもの、教師と一緒に背景制作)	今回の制作活動の目標は何だったのですか？(黙々と作っているところしかみられなかったの) 【質問】	美術のA表現「材料や用具の扱いに親しみ、表したいことに合わせて表し方を工夫し、材料や用具を選んで使い表すこと」が目標でした。
分教室	全体	制作	中	触覚で楽しみながら、生徒さんそれぞれのできる力を生かした創作活動だった。話せる生徒さんとは、相談しながら活動を進めていて良いと思った。	職員の「こうしたい！」という思いが強い場面があったので、生徒さんが自分で選択して活動を進められるとより良いと思いました。 【提案】	実態に応じて、自己決定・選択ができるよう工夫して取り組んでいます。最初からできないと決めつけないで、いろいろと試しながら、提案しながら進めていきたいです。
分教室	全体	自活	高	みなさん、良い表情で参加されていて、学習を楽しみにされている様子を感じることができました。分教室での学習や体験が、すばらしい思い出となって、生徒のみなさんのこれからの人生の喜びにつながるとういいなあと感じます。	今月の歌が高等部の音楽で歌っている曲を同じだったので、一体感を感じることができました。打ち合わせをしていらっしゃるのでしょうか。	特に高等部との打ち合わせ等ははしていません。今月の歌は、担当が決めています。

### <授業見学期間のまとめ>

- 授業参観シートを活用することで、お互いの意見や感想を伝えることができ理解につながった。
- 他学部の授業を見ることで、学習の系統性や発達段階に応じた手だてについて理解が深まった。
- 「主体的・対話的で深い学び」観察チェックシートも活用できるとよい。

## 4 グループ内授業検討会、全校授業検討会の実施

### (1) グループ内授業検討会

各研究グループにおいて、各グループの研究主題に関連した授業を取り上げてグループ内授業検討会を行った。研究グループによって、とりあげた教科等や題材の数は異なるが、どのグループでも少人数によるグループ構成の利点を生かして活発な意見交換を行うことができた。グループ内授業検討会では、学習指導案について、児童生徒の実態や「主体的・対話的で深い学び」観察チェックシートの活用、手だての有効性等について主に話し合われた。グループによっては付箋紙を用いたグループワークなども用い、短時間でよりたくさんの意見がでるよう工夫がされた。

各研究グループの具体的な取り組みについては、次項で紹介する。

### (2) 全校授業検討会

学部別研究で提供された授業実践を検討することで、各部の実践を共有するとともに意見を深めることをねらいとして、3研究グループずつ2回に分けて全校授業検討会を行った。希望を取って各分科会に分かれて行い、グループワーク等で理解を深め合った。具体的な内容については次項の各研究グループの実践報告にまとめた。以下に全校授業検討会の概要をまとめる。

日 時

第1回 11月12日(木) 第2回 12月15日(火) 15:50~16:40

分科会と授業提供者、授業のポイント(協議の柱)

<第1回>

【A分科会(小低)】遊びの指導「水遊び」 対象:小低全児童

ポイント:友達と一緒に楽しめる水遊びのゲームについて

【B分科会(小高)】生活単元学習「図書館へ行こう」 対象:4・5年

ポイント:教科とのつながり。児童それぞれの表現。

【C分科会(中)】数学「時刻を読もう」 対象:中学部数学Dグループ2名

ポイント:生活で必要な力を身に付け、日常生活に生かす

<第2回>

【A分科会(高一般)】作業学習「手芸班」 対象:K・A(高2)

ポイント:表現力を高め、見通しをもって活動するための支援

【B分科会(高福祉)】作業学習「紙工班」 対象:K・T(高3)

ポイント:あきらめずにながら続けるための主体的な姿を促すための支援

【C分科会(重度重複)】自立活動「お世話になった人にペーパークッションを作ろう」

対象:S・K(高3)

ポイント:「つながり」を引き出すための支援

<授業検討会のまとめ>

- グループ別の授業検討会では具体的な手だてや課題について十分に意見を出し合うことができた。
- 全校授業検討会では、学部を超えて、実態や手だて、課題について意見を共有することができた。
- 全校授業検討会ではなく、グループ拡大授業検討会にし自由に参加する形ではどうか。



## 5 各研究グループにおける取り組み

以上の実践に関する各グループでの具体的な取り組みや課題、成果等について次項で研究グループ毎に次の項立てでまとめた。各研究グループの今までの取り組みの経緯、発達段階に応じた手だて、その学部におけるキャリア発達課題への対応などにより、グループ独自の手だてや様式で取り組んでいるグループもあった。

各グループ 10 名程度の構成のため、グループ内授業検討会では活発な意見を交わすことができた。それぞれの発達段階に応じた「主体的・対話的で深い学び」の姿を明らかにすることが本研究の目的であったので、本研究においては「重度重複（自立活動）」「小学部低学団」「小学部高学団」「中学部」「高等部一般就労」「高等部福祉的就労」の6グループに分かれての活動は適切であったと考える。

しかし、高等部においては生徒を一般就労、福祉的就労と分けて指導しているわけでもなく、職員も同様に別れているわけではないので、研究対象生徒の選定や高等部全体としての進め方等で苦慮することもあった。

### < 次章の各研究グループの実践報告 項立て >

- 1 研究主題
  - 2 主題設定の理由
  - 3 推進計画
  - 4 各グループにおけるめざす子どもの姿
  - 5 めざす子どもの姿を実現するための授業改善のポイント
    - (1) 「主体的・対話的で深い学び」観察チェックシートの活用
    - (2) 学習指導案の新様式での作成について
    - (3) グループ独自の取り組み
  - 6 授業実践
    - (1) 取り組みの概要
    - (2) グループ内授業検討会の様子
    - (3) 全校授業検討会より
  - 7 実践のまとめ
    - (1) 成果
    - (2) 課題
    - (3) おわりに
- < 資料 >

各研究グループの実践については個人情報が多いことから Web 版では省略させていただきます。

### < 各研究グループにおける取り組みのまとめ >

- 各学部段階等における課題やめざす子どもの姿について明らかにすることができた。
- 各学部段階等における「主体的・対話的で深い学び」の姿やそのための手だてについて具体的に検討し、授業実践をとおして、児童生徒の力を高めたり、学びを生活につながる視点のアイデアを多く出したことができた。
- さらに教科間、学部間等の連携を進めていくための方策。

## Ⅶ 研究のまとめ

### 1 研究の成果と課題

#### (1) 成果

- 新学習指導要領及び「主体的・対話的で深い学び」について、全校研修会及び高教研講演会により全職員で理解を深めることができた。
- 新学習指導要領に沿った学習指導案様式の作成、キャリア発達段階（学部）に応じためざす姿の整理、「いわての授業づくりの三つの視点」による授業づくりの観点の整理、授業のチェックシートの作成により、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を進めることができた。
- 授業見学期間を設定し、授業参観シートで学んだことや教えてほしいことなどを出し、後日回答する方法をとったことで、学部間の実態共有や授業改善につながる手だて等を学び合うことができた。
- グループ内授業検討会、全校授業検討会の実施をとおして、各研究グループの中心的課題解決に向けての手だてを検討したり、学部間の理解を深めたりすることができた。
- 各学部（研究グループ）における研究主題に関する取り組みでは、それぞれの発達課題に応じた適切な研究テーマのもと、授業改善の具体的なポイントや教科等のつながり、生活場面等へのつながりについて実践し考察を深めることができた。
- 以上により、研究主題である「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善～学びを生活につなげる授業づくりをめざして～の実現に近づくことができたと考える。

#### (2) 課題

- 「主体的・対話的で深い学び」及びカリキュラムマネジメントについてのさらなる研修が必要である。
- 授業のチェックシート（指導者・児童生徒の姿）の改善と活用を図ることが必要である。
- より充実した授業見学期間となるよう、授業のチェックシート（児童生徒の姿）を活用するなどの工夫をすることが必要である。
- 授業づくりの視点では「課題解決（対話的）」「振り返り（深い学びへ）」で弱い面が見られたことから、さらなる手だての検討が必要である。
- 3観点による目標設定では「思考・判断・表現」についての設定や評価に難しさがあったことから、各教科等で求められる「思考・判断・表現」の要素や知的障がい等のある児童生徒への手だてについて整理を行うことが必要である。
- 合わせた指導における各教科の内容のまとまりの整理や系統性の確認を行い、新学習指導要領で求められる各教科の目標及び学習内容が達成されるようにすることが必要である。
- 学びを生活につなげるためには、教科等間のつながりを明確にすることや、さらに家庭生活や社会生活とのつながりを意識していくことが必要である。

## 2 来年度に向けて

2年次における本研究においての一番の成果は本校の児童生徒の発達段階に応じた求める姿につてまとめることができたことである。「主体的・対話的で深い学び」の各学部段階における児童生徒の姿を明確にすることで、学部間の理解や連携、系統性ということを明らかにすることができたと考え。しかし、この姿は、今回の研修対象の教科等に関するものであることから、学部全体における求める姿としてとらえることができるかどうかについてはさらなる検討が必要である。

また、本研究では「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善の手だて（授業のチェックシート）を作成し、実践をとおしてその有効性を確認することができた。本校のチェックシートの特徴は、指導者側では「～している」という意識を持っているかどうかをチェックしていること、児童生徒側では「～している」行動や姿が現実に見られるかどうかということを具体的にチェックしていることにある。単に「主体的」な姿や行動といっても、発達段階や特性によって見られる姿は大きく異なる。その学習グループ（発達段階）で求める姿を具体的な行動でチェックすることで、変容や課題を丁寧に見とることができると考える。「何ができればいいのか」「どんな姿が見られるといいのか」を指導者間で共有することで、効果的な指導や支援につなげることができ、指導と評価の一体化にもつなげることができると考えることから、来年度以降も継続して取り組めるよう工夫したいと考える。

新学習指導要領の施行により、本校の学習内容（題材）が各教科の目標や内容をカバーするものになっているのかを確認し、必要に応じて改善を図ることも急務であると考え。高教研講演会の講師でいらった大西孝志先生も言葉にもあるように「毎朝ランニングや体力作りをしているので『体育』はやっています、というわけにはいかない」のである。各教科等の内容は、知的障がいのある児童生徒であっても基本的にはすべて行うことが求められていることから、年間指導計画やシラバスを見直し、学校教育全体の中でどのように各教科の内容が網羅されているのかを明確にする必要があると考える。教科等横断的な視点で児童生徒の生きる力を高めていくためにもカリキュラムマネジメントを積極的に進めていく必要があると考える。

来年度、再来年度の本校独自の課題としては、新校舎移転がある。本校は長年、校舎の狭隘さや体育館や運動場、プールなどが無いなどの設備の課題、校舎が分かれていること等、環境・設備面で苦慮することが多かった。令和4年度に新しい地、新しい校舎・設備での生活が始まることを踏まえ、来年度はその準備を具体的に始めることになる。待望の夢の新校舎にふさわしい教育課程や授業実践ができるように学校全体で取り組むことも必要である。

一方で、働き方改革も推進されていることから、効率的で効果的な研究体制となるよう工夫することも求められる。

以上のことから、来年度の研究については、「主体的・対話的で深い学び」をチェックシートの活用を中心とした授業実践等の継続とカリキュラムマネジメント（校舎移転後の学校生活を含む）について取り組めるよう、分掌間の連携を工夫しながら、効率的に進めていきたいと考える。

## VIII 資料

### <引用・参考文献>

- ・文部科学省 新学習指導要領リーフレット(2019)
- ・岩手県教育委員会 「確かな学力育成プロジェクト」及び「いわての授業づくり3つの視点(改訂版)」(2020)
- ・岩手県立総合教育センター学習指導案様式例(2020)
- ・岩手県立総合教育センター「特別支援学校(知的)キャリア教育推進ガイドブック」(2008)
- ・特別支援教育における3観点の「学習評価」 【各教科・段階別】 通知表の文例集と記入例 宮崎 英憲 監修/特別支援教育の実践研究会 編 明治図書 (2020)

### <資料>

資料1：新学習指導要領に対応した学習指導案の書き方(令和2年度版)

資料2：学習指導案(略案)

- (1) 重度重複グループ(自立活動) 題材名「七夕集会」
- (2) 重度重複グループ(自立活動) 題材名「お世話になった人にペーパークッションを作ろう」
- (3) 重度重複グループ(重度重複障がい学級交流) 題材名「HAPPY タイム」
- (4) 小学部低学団グループ(遊びの指導) 題材名「水と友だちになろう」
- (5) 小学部低学団グループ(遊びの指導) 題材名「買い物ごっこをしよう」
- (6) 小学部高学団グループ(生活単元学習) 題材名「修学旅行に行こう」
- (7) 小学部高学団グループ(自立活動) 題材名「体を動かそう、気持ちを考えよう」
- (8) 小学部高学団グループ(生活単元学習) 題材名「図書館へ行こう」
- (9) 中学部グループ(国語) 題材名「昨日の出来事を書こう」
- (10) 中学部グループ(数学) 題材名「時刻を読もう」
- (11) 高等部福祉的就労グループ(作業学習「紙工班」) 題材名「浜千鳥のラベルを作ろう」
- (12) 高等部一般就労グループ(作業学習「手芸班」) 題材名「学習発表会に向けて製品を作ろう」

**<資料>についてはWeb版では省略させていただきます。**